

## あみめつないで

そらが澄んでいる。

上げた目に映るのは、ただただ青くて広いそら。手に硬い毛の感じをたしかめながら、わたしはそらを見上げていた。

ときどき手の上がざらざらと動いて、甘えた声が聞こえてくる。目を降ろしてのどを軽くなでてあげると、気持ちよさそうに目をつむった頬が手に乗っかって、そのまま動かなくなる。

セーターの編み目を抜ける冷たい風が、縁側の脇にある柚子ゆずの木を揺らしていく中、手の上のぬくもりで温まりながら、わたしはまたそらを見上げた。

どこまでも青いそら。その中にふたつ、棒がはえてきた。

「ほのか。はい、編み棒」

首だけ振り返ると、おばあちゃまが立っている。い

つもどおり、にこにこ笑いながら。

「ありがとう、おばあちゃま」

忠太郎の頭が乗った右手を動かさないように体をひねろうとしたわたしを、おばあちゃまの手が止めた。しゃがみこんで、わたしの左手に編み棒を置きながら、

「はいはい。ええと　本当に、毛糸はいらないのでですね？」

「え、ええ」

答えたとたん、おばあちゃまの目ががすうつ、と開いて、わたしのそばにある黒い布を見つめて　すぐまた、いつもの顔に戻った。

「そうかい、そうかい。それじゃ、もうすぐお夕飯ですからね」

忠太郎の頭に軽く手を置いて、おばあちゃまは立ち上がった。

そのまま、台所の方に歩いていく後姿を見ていたら、突然足がぴたつ、と止まって、

「がんばりなさいね」

ちらつ、と見えた目が、楽しそうに微笑んでた。

わたしは思わず息をはいて、またそらを見上げた。

自然に、顔がほころんでくるわ。

「ああ、かなわないな。やつぱり」

手の上にいたはずの忠太郎の頭、いつの間にかわたしの肩に乗っていた。

\*\*\*\*\*

「ふあ あ」

思いつきり伸ばした両手をぱつと縮めて、あたりを見た。駅からの通学路は、右も左も学生でいっぱいだけど、誰も気にしてない。ふう。

ああ、大あくびしちゃったよ。月曜の朝って、眠いんだよねえ。あ、ほら、ちよいと先にも、口に手あてて伸びてる子がいるよ。これなら、誰も気にしないはずだよ。って、あれ？

「ええと ほのか？」

背中から近づいて、そおつと声かけたら、ひろい

おデコが振り向いた。

「あ、なぎさ。おはよう」

ほんとにほのかだ いや、あたしが間違えるわけないけどさ。でも、

「珍しいね。ほのかが大あくびなんて なんか、あつたの？」

「ん」

あれれ？『別に』とか返ってくるかと思ったのに、考え込んでるよ。なんか変だな。いや、あくびだけじゃなくて、なんとなくいつもと違う？

あたしはほのかの耳元に口を寄せて、こっそり聞いてみた。

「まさか、変身しなきゃだめなこと？」

「あ、ううん。そういうのじゃないから」

勢いよく首振ったほのかの目、あたしはじつと覗き込んだ。



まったく。あれから学校につくまで、ふたりしてずーっとお腹の脇つついてくるんだもんなあ。おかげで筋肉ひきつるわ、変な大笑いの顔をそこらにさらすわ

ため息ついたあたしの目に、ほのかの席が映った。だいたい、おおもとはほのかなんだよね。思わせぶりなことするから あれ？

「そんなむくれないですよ。もう」

莉奈がひそひそ声で、勝手なこと言ってる。その原因は誰だつー いやいや。莉奈よりほのかだよ。ほのか、手が机の上に出てないのに、肩が動いてる。手はどこよ？ ああ、朝みた棒——編み棒だ。机の下で、びよこびよこ動いてる。

ほのかが内職ねえ。珍しいこともあるもんだわ。まあ、内職もできないあたしには言われたくないだろうけど。

3日前の家庭科、マフラーがちゃんと編めなくって、結局投げちゃったもんなあ。ほのかにグチこぼ

したら、黙って回収されちゃうし はあ。

それにしても、ほのか、大丈夫かな？ 慣れないことすると、かえって目立つんだけど あ、ヤバ！ よし美先生がほのかの方に歩いてきてる!?

「なぎささ、ほーら、羽ペンだよー」

横向いたあたしの首すじに、ふわふわしたものがさわってきた。こ・い・つ・ら・はあ〜っ！

「いーかげんにしなうてばっ!!」

その瞬間、空気が凍った。なんの音もしないよ。こわいくらい。

そおつと前を見たら、目が合った。教室の真ん中、よし美先生の、まんまるな目。

「え、ええつと 美墨さん？ ああ」

ほのかから目え放した。だったら、よおし!

「はいっ！ 美墨なぎさ、廊下に立ちますっ！」

あたしはノートをちっちゃく破ってちよつとメモしてから、そのまま外に飛び出した。途中でバケツ拾うふりしながら、メモを目的地へひよいつ、と。

最後にチラッと見えたけど、よし美先生まだぼけつとしてたよ。よしよし、こついつときは、逃げるが勝ちつてね。

\*\*\*\*\*

教室のとびらをぴしゃつ、と閉めて、あたしは柱によっかつた。

1時限立ちつばなしかあ。まあ、足腰のトレーニングと思えば、どつってことは、あ、ひゅーつと、細くて鋭い風の音

うっひいっ！ さ、寒いっ！！

な、なんで学校がこんなに　　って、まどが開いてるっつ！？

あー、もうしょうがないなあ。閉めてこようつと

「美墨さん！ 罰なんだから、動いちゃダメよ？」

足を一歩前に出したとたん、教室の中からよし美先生の声が飛んできた。それも、なんだか笑つもの

らえてるっばい声。曇りガラスだつていうのに、よく見えるなあ。

う。もう、その場モモ上げで暖まるくらいしかないかあ。

「あゝあ、早まつたかなあ？」

「あたりまえ、です」

!?

あたしは、思わずその場で飛び跳ねちゃつた。いきなり声が　　って、え？ ええっ！？

「なんで、ほのかが　　むぐっ！？」

あたしの口には手のはりついて、小さく『しーっ』って声。あたしは手をはがして、

「なんでほのかまで来るのよ？ これじゃ、意味ないじゃない」

ほのかに近寄つて小声で言つたら、あたしの右手が軽くなつた。バケツの重さ確かめるみたいになんどか上げ下ろしして。もう、なにやつてんのよ、まつたくっ！

「ほのか!？」

言った瞬間、ほのかがあたしを見上げて、ため息ついた。なんだろ、って思ってたら、

「なぎさはわたしの何よ?？」

教室がいきなり騒がしくなつて、ピクツとしちゃう。聞こえてないよね? まったく、ひとに『しーっ』なんてしていて、自分の方が声大きいんだもんなあ。

教室の方ちらちら見てる間も、ほのかの視線が痛いよ。あたしの目、まっすぐ、じーっと見つめてる。なにして、そりゃもちろん だけど、ねえ?」

「ほのか、いったい」

「いいから答えて!」

小さいなのに、すつくく怖い声だよ。ええとしかたないなあ。

「と、友だちだよ。もちろん」

ああもつ。顔が熱くなつちゃうじゃない。こーいうことつて、本人に言うの恥ずかしいんだつてば。

あれ? 目の前に紙が出てきた。走り書きのある、

ノートの切れはし。

「その『友だち』に、こんなメモ残して廊下に立たれて。なぎさだったら平気でいられる?」

目の前でゆれてるのは、あたしの文字。『よし美先生見てる! しまつて!』って。そんなの、ラッキーくらいに思えば あ。

あたしは思わず頭かかえた。そうだ。相手はほのかなんだつた。

「わかつた? それじゃ えいっ♡」

うわつ、な、なに? いきなりおなかに抱きついてきた!?

「ちよ、ちよつとほのか?」

「変な遠慮したバツよ。協力してね ん。こんなもの、かな?」

腰から胸の下あたり、なんども抱きついちゃメモとつてる。なにか測つてんのかなあ? それにしても な、なんだかまた、背中の方がうるさくなつた気がするよ。気のせい だよな?

「な、なにやってんの?」

「ん? ないしょ。あん、このへんも、ね」

うひゃ!—こんどは胸に抱きついてきた。ああ、なにかわかんないけど、早く終わらせてくんないかなあ。また背中できゃあきゃあ言ってるような気がするし。

「それじゃ最後ね。んー♡」

そう言いながら、またじいっ、とあたしの目をみつめてる。手が首に巻きついて、顔がゆっくり近寄ってきて。って、わーっ!! ちよっと、なに? なによっ!?

「こあらっ!—廊下でなに不純同性交友 あ、あら?」

目の前がほのかの顔でいっぱいになった瞬間、よし美先生の大きな声が飛んできた。教室のとびらが聞く音が聞こえないくらいの大声、だったんだけど——あら、って?

「ええと あ、雪城さん?」

そういえば、目の前だったはずなのに。って横向いたら、バケツ持ったままのほのか、だまって首か上げてるよ。

「もっ、罰なんですからね。暴れちゃダメよ ちえ」

い、いま先生『ちえっ』って言った? 『ちえっ』って!?

ぶつぶつ言いながら教室に入ってく先生見てたら、勝手にため息でちゃった。このクラスも、なんだかなあ ん? なに、この手。

「やっぱり、みんなの期待には応えるべきよね♡」  
白くて細い手が、またゆっくり首に巻きついてく。もう、どーでもいいや、って思った目の端に、教室の曇りガラスが映った。

待てよあ、今のあたしたちの姿、影だけ見たら——ちよっと、いまほのかなんて言った!?

「そんなの、応えなくていいのっ!!」

\*\*\*\*\*

「ユリコせんぱーい、スイッチ入れてくださいー」  
 声に手だけで応えて、柱についてるリモコン操作  
 すると、白衣のすそが風にゆれた。

風のもとは、理科室の古いエアコン。吹き出し口  
 から出てくる風は、あつたかいんだか涼しいんだか、  
 ちよつと微妙な感じ。

放課後になつても寒いまんまの理科室だけど、暖  
 房に關しちや火氣厳禁なんだよねえ。でも白衣の下  
 にコート着込む子までいる、つてのはちよつと。来  
 年こそは、エアコン新しくしてもらわなきゃ。

アテはあるんだよねー。わたしのすぐそばに。  
 長くてきれいな髪に、ひろいおデコ。化学部自慢  
 のほのかに『必要だ』って言つてくれれば、大抵の  
 備品は二つ返事で買つてもらえるもんね。

問題は、それをどうやって言わせるか。そこ  
 は、わたしの腕の見せどころ、かな？

みんなの机のアルコールランプの火の上で、ガラ  
 メと水の入った蒸発皿から湯気がのぼつてる。3学  
 期は期間が短いから、かるゝい実験が多くて都合が  
 いいわ。

わたしはちよこちよこ、つとほのかのそばに寄つ  
 た。なんだか眠そつな顔してるなあ。運動部がオフ  
 シーズンだからつて、美墨さんと遊びまくつてる、な  
 んてうわさもあつたりするんだよね。ま、化学部の  
 中じゃ、わたしが蹴散らしてるけどさ。

さて、右手に電池式のミニ扇風機持つて、もちよつ  
 と近づこう。足元から冷風浴びせてあげれば、ほの  
 かもその気になるでしょ。あれ？

ほのかの前の蒸発皿が、なんかヘンだ。アルコー  
 ルランプの上で、湯気立ててるのはみんなと同じな  
 んだけど、それだけみたい。これつて、ただの、お  
 湯???

「ちよつと、ほの」  
 声かけようとして、わたしは気付いちやつた。な



るほど、ね。

「ほのか。ちょっと、なーにやってんの？」

「え？」

叱られた犬みたいな顔したって、だーめ。

「とぼけない。机の下から手えー出して！」

化学部のみんなの目が、わたしとほのかに集まっている。その中で、ゆっくり出てきた手にあったのは予想通りのものだった。

毛糸でできた、編みかけの布みたいなのに、編み棒が2本。

「実験中にほかの事やると危険だ、っていつも言っているの、ほのかだよな？」

「あ、えつ、と」

わたしが硬い声で言つと、ほのかの目が泳いだ。まわりのみんなが、息を飲んでる。ヤバい、かな？  
うん、そうだね。

わたしは毛糸持ったほのかを立てせて、背中を押しながら理科室のとびらまで連れてつた。そこで音

がするくらい大きく息を吸って、

「編みあがるまで、とびらからこちに入ってくんじやないっ！ 出てけーっっ!!!」

思いつきりの声を吐き出すと同時に、声の勢いのまんまとびらを閉めてやった。

上履きの足音が遠ざかっていく。あとには、しーんとした理科室と、ザラメがとけて煮詰まってく音がするだけ。あゝあ、新しいエアコンが遠くなっちゃったな。でも

ひとつ息ついてから振り向いたわたしの目を、みんながじいっと見つめてる。そのまま、自分の実験机に戻ろうとするわたしに、声がかかった。

「ちよ、ちよっとちよっと、ユリコ！ いくらなんでも、今の言い方って え？」

あたしがおもわず吹き出しちゃったんで、言いかけた子があつけにとられてた。その子の肩、ぽんぽん、って叩きながら、

「ほのかってば、化学部ケガクにしすぎなんだもん。あー

でも言わなきゃ、ずっと内職しっぱなしだよ？」

にやーつ、て笑い浮かべてまわり見回したら、みんながほっとした顔になった。うん、大丈夫。

「なんの編み物が知らないけどさ、たまには部活忘れて、趣味に集中してもらおうよ。」

さ、わかったら実験の続き。重曹溶液の濃度と、煮たザラメの温度、ちゃんと記録してね」

はーい、っていう声が響く中、わたしは昼休みに聞いた話を思い出してた。

今日の1時限目。ほのかが廊下まで美墨さん追いかけて、あっちこっち抱きついてた。桜組の子がきやあきやあ言いながら話してたっけ。

朝っぱらからあのふたりは なんて言ってたけど、理由もないのにそんな色ボケなマネするわけないじゃない。ほのかなんだから、さ。

「ま、化学部はうるさい小姑がやっただげるから、がんばんなさい、ってね」

ははは。ため息ついでにぼそっ、と口に出ちゃった。

さあて、それじゃわたしもザラメを煮とかしてつて、あれ？ みんながわたし見てる？

「報われない愛、ですか？ ユリコ先輩♡」

近くにいた一年生に言われて、わたしは実験机へたりこんだ。もう、みんなしてそんなキラキラした目で

「ああ、化学部も色ボケの集団かあ」

\*\*\*\*\*

ふう、さつむいなあ。せつかくラクロスであったまった体なのに、だんだん冷えてくのがわかる、っていうか。

学校からの帰り道。ときどき吹いてくる冷たい風には、コートなんて役に立たないよ。

やつぱ、苾まであつたまつてないのかな？ 冬ど真ん中のこの季節、部活はほとんど体力づくりだけ。3年の先輩がいなくなつて、だらけな程度に活動

してる、って感じだもんね。まあ、寒い中でキツくすると体こわしちゃうから、欲張っちゃいけないけどな。

「で、どこ寄る？ やっぱ、あかね先輩のどこ？」  
となりから聞こえてくるのは莉奈の声。学校帰りが化学部より早くなっただんで、最近は莉奈たちと帰ることの方が多いな。それにしても

「でもでもでも、たまには他のどこも行きたいなあ。なぎさは？」

なーんか、朝からヘンなんだよねえ。1時限目にペタペタされたと思ったら、次の時間からはあたしの方なんか見もしないで編み続けてるし。

「ん？ なぎさ？」

帰りがけに理科室覗いたけど、実験中なのに姿が見えなかったし。なーにやってんだろ、まったく。

「な・ぎ・さ・さ・さ！」

う、うわあっ！

あたしは思わず飛びのいちゃったよ。い、いきな

りふたりして顔ドアップにしてるんだから！

「な、なによ、いったい!!」

「『なによ』じゃないでしょ？ なーにぼっつとしてるんだか」

あ、ふたりの目がなんかヤバイ。えーと、えーと

「そ、それより、さっきどこ寄るかとか言ってたなかった？ あたしねえ、古着屋行きたいんだけど」

両手バタバタやってたら、莉奈たちの目がきょん、となった。

「寄るのはいいんだけどさあ」

「そうそうそう。買うのは、もらってからにしたほうがいいんじゃない？」

ふたりの顔、ニヤニヤしてるよ。

「やっぱ、そう思う？」

そうなんだよね。編み棒もって内職してて、なんでもないのにあっちこっち抱きついて、なんか測ってるんだもん。あたしだって、そうかな、って思ったりもしたんだよ。

でも、それもなんか変だ。誕生日みたいな特別な日なんかしばらくないし。いきなり ねえ？

「ねえねえねえ、なぎさ、さつき理科室覗いてたでしょ？」

「うわっ！ 志穂が目の前来てるよ。またぼっつしちゃったか で、なに？ 理科室?？」

「なぎさが理科室の中じゅっつと見回してる間に、あたしたちはちゃーんと化学部の子にインタビューしてきたのでしたー」

「そっそっそっ。ほのかちゃん、追い出したって言うてたよ。編み物するなら家でやれっっ！って」

「ふたりして、またあたしにせまってきてる。なんか、楽しそうだなあ。」

「そっか。ほのか、化学部でも編み物してたんだ。」

「やっぱり、変だよ。そっまでしないといけない編み物をあたしに、なんて。」

「そっ、単にあたしとサイズが同じ子がいて、その子にあげるとかじゃないのかな？ あたしならべた

べたさわっても大丈夫だけど、そんなことできないくらい大切な子だとか

「だめだ。あたし、そんなこと信じてない。信じられない。」

「あたしって もしかして、うぬぼれすぎ、なのかな？」

「あ、息が勝手にため息になっちゃった。目もんだか、ふたりと合わせらんないよ。」

「あたしが一番、なんて、なんで考えちゃっつんだろ。」

「これじゃ、まるつきり子供じゃない。なんの証拠もないのに あれ？ ほっぺたが痛い？」

「そーいうことをこの口で言ってる？ うりゃー！」

「莉奈の手が、あたしのほっぺた両方ともつまんでつまんで」

「いはははは、いはい、いはいっへー！」

「思いつきり首ふってなんとか逃げた瞬間、右腕が重くなった。そあつとその先見ようとしたら、ぐいっつと引つ張られて、そのまま引きずられちゃう。」

「はいはいはい、それじゃ、うぬぼれかどうか確認  
しましょー。今すぐ、ほのかちゃん家に直行〜!!」  
公園に行く道から外れて、駅の方にぐいぐいって  
志穂お、こんな力あんなら試合で使つてよあ〜。

\*\*\*\*\*

チャイムの音が、広い庭にちゅちゅく響いてる。

あ〜あ、志穂たちにはけしかけられて、とうとうほ  
のかン家まで来ちゃったよ。ふたりとも帰っちゃった  
けど、ここであたしも帰ったら、明日なにされるか  
わかんないもんなあ。

でも いったい、なんて聞けばいいんだろ？

『その編み物つて、あたしのなんでしょ』とか？  
う〜っつ、ありえなくいつつ!! どのキザ野郎  
よ、それ!

「はいはい、いま開けますよ」

少し低めで澄んだ声が聞こえてきたと思つたら、そ

のうちすうっと、音もしないで玄関の戸が開いた。出  
てきたのは ああ、ほのかのおばあちゃんだ。ふっ。  
なんかちよつとだけほつとするな。

「ああ、やっぱりなぎささんね。ほのかはいま、忠  
太郎を散歩に連れていってますよ。もうじき帰つて  
くるから、上がって待っていてくださいな」

いつ見ても、ににににしているなあ、このおばあちゃ  
んつて。

あたしはありがとつございます、つて言つて靴を  
脱ぎ始めた。そしたら、

「そうそう、なぎささん。学校で、ほのかはずっと  
編み物していませんか？」

「ええっ？ な、なんでわかるんで ツッ!？」

脱ぎかけの靴のかかと思いつきり踏んじやつて、あ  
たしは痛くて思わず飛び跳ねそうになった。なんと  
か我慢して頭上げたけど、おばあちゃんは相変わら  
ず、ここにこしたまんま、

「あの編み物、何の毛糸で作っているか、わかりま

した？」

あたしは右足つかせてさすりながら、首を横に振った。痛くって声が出ないよ。そついえは、そんなとこ見てなかったな。いやまあ、毛糸の種類なんて、あたしにはわかんないけどさ。

「あれはね、実は、古着のセーターなの。」

誰かにもらった、って言ってたわね。とつても気に入っていたみたいだけれど、それをほどいて、編みなおしているんですよ。」

あたし、動きがとまつちゃった。古いもの??

つてことは、ええと、え??

「それは、なんで??」

ほのかのおばあちゃん、また、ほほほ、つて、おかしそうに笑いながら、

「それは、ほのかに聞いてちょうだいね」

柔らかい声で言い残して、そのまますべるみたい歩いてく姿をぼーっと追いながら、あたしは玄関に立つてた。

いつの間にか降ろしてた右足のかかどがまた痛くなるまで、しばらくかかった。

\*\*\*\*\*

「ただいまあ。きやー!」

背中が開く音がしたと思つたら、なにかがぶつかってきた。振り返つた先で、白いセーター着た女の子が鼻を押さえてる。

「いたた——ごめんなさい、ちょっと気を取られていて。あら? なぎさ!」

そつかあ。忠太郎の散歩から帰ってきたんだあ。

「ああ。ほのか、おかえり」

あたしはなんかぼーっとしてた。あたま中、セーターと毛糸玉がくるくる回ってる。

「おかえり、じゃないわよ。来るのなら来るって言ってくれば。あ」

そつだよね。いきなり押しかけたりして、あたし

もなにを　　って、ちよつと待ったつ！

「ほあゝのかあゝつー！」

「そ、そうね。今日は、話す時間なかつたものね」

両手であたし押さえながら苦笑いしてる顔見たら、ちよつとほつとした。ああ、今朝からのヘンな感じじゃない。いつものほのかだ。

あたしがふう、って息ついたら、ほのかがちよつちやく『ごめんね』って言った。もう、それだけでみんな許せちゃう。単純だなあ、あたしって。

「ちよつとよかつたわ。これから、届けに行こうと思つてたの。ちよつと待ってね」

肩からかけてた布のバッグに手を入れて、するするつと出してきたもの　ええと　??

「ふふ。見覚えはなあい？」

クリーム色の、マフラー、だよな？　見覚えって言われても　あれ？　よく見ると端っこだけがう布だな。黒っぽくて硬い、板みたいな　って、

あああつ！！

「わかつた？　この端の部分、なぎさのマフラーよ」

そうだ、こないだの家庭科の実習で、あたしが途中で投げ出したヤツ。ほのかが持っていたんだっけ。でも、こつちやって見ると

「どう？　似合つてない？」

やわらかいクリーム色の部分と、黒っぽくて硬い部分。ホント、ぴつたりだ。ちよつとだけでも、あたしが編んだなんて、信じられないくらい。

何度もつなずいてたら、くすくす笑つ声か聞こえた。

「なぎさの編み物、丁寧すぎるの。そのうえ力いっぱいやるから、編み目が詰まっちゃうだけ。編み物ができないわけじゃないよ。」

それじゃ、胸を張つて渡しに行きましようか

へ？

上げた顔の前で、ほのかがつこり笑つてる。

「あれえ？　覚えてないの？　『編み物できるなら、好きな人にアタックだつて、すぐできるのになあ』って言つたの、なぎさよ？」

いいっ!? あ、でも待てよ。そういえば、編み物投げ出したとき、冗談半分でそんなこと言っちゃったかも。絶対、ありえないから

ちろっ、とほのかの目を見たけど、目だけ笑ってない。ちよっど、これ、本気だよ。どうしたらあ、そっか。

「あたしは端っただけでしょ? 長いところはほのかのなんだから」

「残念でした。ここの毛糸ってね、なぎさにもらったお古のセーターなの。だから、まることなぎさのものよ♡」

さあ、もう観念して。なぎさの好きな人のとこ、行きましょっか」

最後まで、言わせてもくれないいいっ!

これが目的!? 朝から寝ぼけた目して、授業中や部活でまで内職して、その目的がこれ!? ありえない! ぜったいありえない あれ?

ほのかの顔、必死だ。冗談でやってるんじゃない。ってことは ああ、もう! バカはあたしかあ!

「どこにも行かなくていいって」

あたしは、押し付けられたマフラー、ほのかの首にかけた。

長くてあまつちやってる部分を、自分の首に巻いて、「はい、これで目的達成だよ。 なにか文句、ある?」

抱きかかえるみたいで、じつと目を見てたら、ほのかがいきなり吹き出した。

「あゝあ、失敗みたい。今度こそ、幸せな顔のなぎさが見られると思ったんだけどなあ」

1年前だったら、きつと怒ってたんだらうな。よけいなことするな、って。

あたしの首に、ふたり分のマフラー巻いてくほのか見ながら、あたしはそう思った。

でも、今は違う。ほのかがどんな気持ちで仕掛けてるか、知ってるから。だけど



玄關を出て門を開ける前に、あたしはちよつと振り返つてみた。玄關の電灯の下で手を振つてゐるのか、マフラーぐるぐる巻きのあたしよりあつたかそつ。

あたしの幸せな顔が見たい、かあ。

でも、それ一番見てゐるのつて、きつと

—おしまい—